

創世記45章5-8節 「すべてを司る神の摂理」

1A わざわいをも創造される方

- 1B 圧倒的な主権者
- 2B 神のかたち
- 3B 善のために動かす方

2A 神の救いのご計画

- 1B アブラハムの召命
- 2B イスラエルの選び
- 3B エジプトへの避難
 - 1C 家から民へ
 - 2C カナン人への忍耐

3A エジプトへ遣わす方

- 1B ヤコブ家のお家騒動
- 2B 共におられた主

4A 父なる神のご計画(ロマ 8 章 28 節)

- 1B 「すべて」
- 2B 「神を愛する人たち」
- 3B 「ご計画に従った召し」
- 4B 「益」

5A 信仰と忍耐

- 1B 「知っている」
- 2B キリスト殺しにあるご計画
- 3B 苦しみを学ばれた方

本文

創世記 45 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、44 章まで来ていました。午後礼拝で、45 章から 47 章まで一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、聖書全体の中で真骨頂の一つを見ていきます。45 章 5-8 節です。「⁵ 私をここに売ったことで、今、心を痛めたり自分を責めたりしないでください。神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。⁶ というのは、この二年の間、国中に飢饉が起きていますが、まだあと五年は、耕すことも刈り入れることもないからです。⁷ 神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによって、あなたがたを生き延びさせるためだったのです。⁸ ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです。神は私を、ファラオには父とし、その全家には主人とし、またエジプト全土の統治者とされました。」

ヨセフは、兄たちに自分自身を証します。穀物を売っていたエジプトのお代官様は、実は弟ヨセフでした。そして、彼が自分の正体を現した後、すぐに語ったのは、この言葉です。あなたがたが、エジプトに売ったのは、実は神がエジプトに私を先に遣わしていたことなのだ。このことによって、私が統治者となり、ヤコブの家を飢饉から救い出すためなのだ、ということです。

1A わざわいをも創造される方

私たちは、これまでヨセフがいかに不条理の中を通り、悲惨な目にあったかを見ました。しかし、それは神の綿密なご計画の一貫であり、禍をもご自分の目的のために、善のために働く方なのだということを思います。

1B 圧倒的な主権者

このことを端的に言い表している、神ご自身のことばがあります。イザヤ書 45 章 7 節です。「わたしは光を造り出し、闇を創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは【主】、これらすべてを行う者。」預言者イザヤは、ペルシアの王キュロスを、ユダヤ人をバビロン捕囚から解放するための器として用いることを、預言していました。そこで、ペルシアで信じられていたゾロアスター教では、光の神アフラ・マズダと、闇を司るアンラ・マンュの戦いが繰り広げられていると信じていました。光や善は神が支配しているけれども、闇の力はまた別にあって、その二つの勢力が戦っているとしていたのです。

しかし、主はそうではありません。異教徒である王が、主なる神のユダヤ人に対する救いのために用いるという、だれも考えつかない方法を用いられたのです。全く神を信じない人が、神を信じている人々のために、大いに用いられるのです。しかし、神は、「光だけでなく、闇も創造したのだ。平和だけでなく、わざわいも創造するのだ。」と宣言されたのです。この方が、悪も含んで、すべてを支配している主権者なのだと明言されたのです。

2B 神のかたち

しかし、神は悪を行われる方なのでしょうか？ここが、多くの人の疑問です。「なぜ、愛の神が、悪いことが起こることを許されるのか？」ということです。聖書は明確に、「神は悪に誘惑されることのない方（ヤコブ 1:13）」とあります。ではなぜ、闇を創造し、禍を創造する者と言われるのか？

神は、ご自分のかたちに人を造られました。ですから、神が自由意志を持っておられるように、人にも自由意志を与えられました。そのため、神は悪を人が選び取るのを強制的にやめさせることはできません。もし、それをしてしまったら、神のかたちを否定することになるからです。

3B 善のために動かす方

しかし、神はすべての主権者です。ですから、悪をもご自分の目的のため、善のために積極的に

利用することができます。それが、「わざわいを創造する」と言われた理由です。

つまり、悪魔は、神の目的を潰すために必死になりますが、そのしわざを見事、ご自分のほうに持つていかれます。大逆転劇を神はお独りで演じられます。トランプで、たった一枚のカードで、これまでかけていたものが、一気にすべて持つていかれるようなことがありますね。それを神は悪魔に対してしかけられます。自分が必死に神に反対していることを、神ご自身は圧倒的な、比べ物にならない知識と知恵で、すべてご自分の目的に持つていかれるのです。「エペ 1:8-10 この恵みを、神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」そして、知恵ある者と呼ばれる者たちを、すべて愚かにされます。(I コリ 1:19-20)

2A 神の救いのご計画

そこで、私たちはヨセフの生涯を、神のご計画にしたがって見ていきたいと思います。これまで、私たち人間の視点で見てきましたが、ヨセフが途中で悟った通り、神の視点でみたいと思います。

1B アブラハムの召命

主は、ご自分のかたちに造られた人が罪を犯したので、ご自分から離れなければならなくなりました。しかし、すぐに人をご自分のものに引き戻す、贖いの働きを始められました。それが、アブラハムの召命です。彼を召して、カナンの地に連れて来させて、それから彼の子孫によって、すべての部族が祝福されるようにされました。

2B イスラエルの選び

また神は、アブラハムを大いなる国民とすると約束されました。すべての国民に対して祝福となるべく、ご自分の民イスラエルを選ばれたのです。

3B エジプトへの避難

そこでアブラハムに、主はこれから行うことを示されました。「15:13-14 あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隸となって苦しめられる。14 しかし、彼らが奴隸として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。」

1C 家から民へ

ヤコブは十二人の息子と娘たちに恵まれましたが、その後に生まれた孫たちを加えて、70 人しかいない家族でした。70 人いたらすごい人数かもしれません、民族とみなすのはあまりにも

心細い人数です。

しかし、主は、ヤコブの家を民にするために、エジプトを選ばれました。午後礼拝の時に見ていきますが、彼らはエジプト人の忌み嫌う羊飼いの仕事を、ゴシェンという地で行っています。カナン人と共にいたら、いつもカナン人をめとて、イスラエルの子孫が危ぶまれることは、アブラハム、イサク、ヤコブの生涯ずっと付き物でした。しかし、エジプトにおいて、エジプト人のほうがヘブル人を忌み嫌っていたので、それで彼らだけで守られるのです。それで、民が多くなり、強くなつたことが、次の書物、出エジプト記の冒頭で出てきます。

2C カナン人への忍耐

そして主は、カナンの地にいる住民に対して、忍耐しておられました。彼らは、忌まわしいこと、滅ぼされるに値することを行っていました。しかし、主は忍耐してやまない方です。もう遅すぎるのは？と思われる時まで待たれる方です。それで、主は、四百年の間、エジプトにイスラエル人たちを置かれるままにされました。創世記 15 章、続きの言葉を読みますとこうあります。「15:16 そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時までに満ちることがないからである。」ヨシュア率いるイスラエルの民は、カナンの地にいる先住民を滅ぼしていくが、それは神がカナン人らを裁かれたからです。

3A エジプトへ遣わす方

そこで、神はヤコブの家を、まずエジプトに移住させなければいけません。けれども、思い出してください、アブラハムはエジプトに下ることによって失敗しました。イサクも、エジプトに下ることを厳に戒められました。ヤコブもそれを知って、ベエル・シェバまで来た時に、父イサクの神にいけにえを献げました。彼もためらっていたのです。

1B ヤコブ家のお家騒動

しかし、主は、彼らが一時エジプトに下るようにするために、ヤコブの家の中のお家騒動を用いられました。ヤコブがヨセフに偏愛し、それで兄たちがヨセフを妬み、殺意を抱き、エジプトに奴隸として売りました。

2B 共におられた主

しかし、神はこれを用いられたのです。その証拠に、ヨセフがポティファルの家に売られた後に、「39:2 主がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり」とあります。主がともにおられたのです。主が遣わされて、それゆえヨセフが使命を果たすことができるよう、共におられました。

4A 父なる神のご計画(ロマ 8 章 28 節)

このことを、すべて解説するための新約聖書の書物が、ロマ書、特に 8 章後半部分と言えるでし

よう。ロマ 8 章 17 節から、苦しみの問題をパウロが取り上げています。キリストが苦しまれたように、神の子どもとされた者たちも苦しむ。しかしその後に、キリストが栄光に入られたように、私たちも栄光の中に入ると約束しています。そして、その苦しみやもがきの中で、御靈が、言いようもないめきをもって、祈りを助け、みこころにしたがって執り成してくださるという約束も与えています。キリスト、御靈の働きがそれぞれ書かれていますが、それから、父ご自身の計画を語ります。それが、8 章 28 節です。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」苦しみのある中でも、主がそれらを相働かせて益とさせるのです。

1B 「すべて」

ですから、ここでパウロが、「すべてのことがともに働いて」いう「すべて」が、これら苦しみを含むことを意味しています。良いことは神からのもので、悪いことは神からものではないから、神はここには関わっていない、ということではないのです！苦しみの時、私たちは神から離れてしまっているのではないか？神が私を見ておられないのではないか？と思い悩みます。しかし、すべてをともに働かせているのです。

2B 「神を愛する人たち」

そして、ここで大切な条件があります。「神を愛する人たち」のためなのです。ヨセフは、神を畏れ、神を愛していました。神を愛しているからこそ、どんな悪いことが起こっても、それが善になるように、神が働かせていることを知ることになります。

イエスが復活後、ペテロに聞かれましたね。「わたしを愛していますか？（ヨハネ 21:15）」ペテロは、愛しているのは、あなたがご存知ですと答えていますが、実はギリシア語が違います。主が聞かれたのは、私をアガペの愛で愛していますか？ということです。これは、どんな犠牲があっても、それでわたしを選び取りますか？ということです。しかしひテロは、フィレオの愛で愛していると答えました。フィレオは、友情のような愛、条件があつての愛です。私たちの多くが、ここで試されます。今の状況が良いから、イエスを愛しているが、悪くなればそうとは限らないという愛です。自分の目の前にあるものがとても大好きで、それをイエスの言われていること以上に愛するのであれば、アガペの愛で愛しているとは言えません。

しかし、どんなことがあっても、それでもイエスを愛すると決めた人々には、大きな苦しみが待っているかもしれません。ヨセフが、言い寄られたポティファルの妻に対して、神に罪を犯すという上で、その場から逃げました。しかし、それによって監獄に入れられたのです。犠牲が伴います。

3B 「ご計画に従った召し」

しかし、この愛は、私たちの力で、肉の力で抱くことはできません。ペテロは、死ぬまでイエスに

ついていくと豪語したのに、舌の根が乾かぬうちに、この人は知らないと三度も言ったのです。それで、この愛は、神の召しによって与えられるものだというのが、パウロがロマ 8 章 28 節で言っていることです。「すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのため」とあります。召しの力が兄弟です。主が、こよなく私たちを愛し、憐れみ、それで選んで、召したのです。その召しによって、私たちは、どんなことよりも主を愛するという選択ができます。神を愛せない人は、自分の頑張りが不足しているのではなく、主の召しに対する確信が薄いからです。

キリスト者の生活は、神のご計画にしたがった召しによって支えられます。救われるなどを筆頭に、聖められること、また、主に仕えることに召しが必要です。また、結婚にも召しがあります。自分が選んだのではなく、神が選ばれて、それでその召しに従順になった時に、主ご自身が働いてくださいます。もはや、自分がするのではなく、自分自身を通して主がしてくださるのです。ですから、神の愛で、愛することができるのです。人間の愛はちっぽけですが、従順になる時に、キリストの愛で満たされ、その愛で神を愛します。

4B 「益」

そして、「益となる」とありますね。これは善という意味です。神は良い方、善ですから、この方のご目的になるということです。

5A 信仰と忍耐

1B 「知っている」

そして、最後に知っていただきたいことは、「私たちは知っています」であります。ここにギリシア語は、「オイダ(oīda)」です。知るという意味のギリシア語で、「ギノウスコウ(γινώσκω)」があります。ギノウスコウは、関係によって個人的に経験として知るという知るであり、オイダは、事実や観察をたどって、それで知るという意味です。言い換えれば、「そうであるはずだ」という認識です。神は良い方であり、この方の目的のために、すべてのことを相勧かせてくださっていることを、その苦しみの渦中にあっても、知っているのです。

キリスト者は、まだ目に見えていないこと、また目によっては正反対に見えることであっても、神の真理、その目に見えないところでは、こうなっているはずだという認識を、持つことができます。御靈によって、信仰によって、そういった確信を持つことができます。ちょうど、小学生の男の子が、髭が生えてくるはずだと思って、髭剃りをしているように、まだ見ていないけれども、確実にそうなると分かっていて、それで行動に移すのです。それが、信仰です。

2B キリスト殺しにあるご計画

ヨセフは、そのように信仰を働かせて、監獄にいる間も神を畏れて生きていました。そして、キリストご自身がそうでした。神の御子として、すべてのことを予めご存知でした。ご自身が、人となつ

て、その肉体をもって、すべての人の罪のいけにえとなることを知っておられました。(詩篇 40:6-9 参照)ペテロは、聖霊が降ってから、そこに集まって来たユダヤ人たちに説教をした時に、キリストを殺したという大罪を犯しながら、それが神の定めであったことを宣べています。「使 2:23 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。」

3B 苦しみを学ばれた方

しかし、主はそれでも、人として父なる神を信じ、この方により頼み、それで苦しみを経たのです。「ヘブル 5:7-9 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。8 キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、9 完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、」

興味深いことに、主は、「従順を学」んだとあります。主はすべてを知っていますが、学ぶことがあったのです。それは、人としての従順です。神の御子としては、これがみこころであることを知つておられましたが、人としては、その制約の中で知らないことが多く、ただ父なる神に言われているから、それで従っていくということを学ばれました。このことによって、私たちが、今の苦しみが何のためにあるのか、分からぬといいう人たちのためにも、同情し、執り成してくださいます。

このように、神のご計画は、ヤコブの家のお家騒動のようなこと、欠けのあることも用いられて、実現されて行きます。そしてそのことを、私たちは体験や、目に見えることでは決して認めることはできなくとも、認めることができます。その条件は、何にも増して、条件なしで、神を畏れ敬っていることです。主を愛していることで、いろいろな大変なことに巻き込まれるかもしれません。けれども、その大変なことに巻き込まれていても、確実に主は良きに計らうことを知っているのです。